外村繁論

――作品とその信仰――

中野恵海

はしがき

近代文学に於て、真の意味で、浄土真宗的作家は誰かという事になると、丹羽文雄と外村繁の二人が挙げられると思う。この二人は、その生い立ち、作家的稟質や文学の内容が甚だしく違う。本稿は外村繁を採り挙げて、彼の文学の本質を追求しながら、浄土真宗との関係を見ようとした。テキストは、講談社版の外村繁全集によった。（全六巻・昭三七年八月完結）

一　戦前の作品

(1)　初期の作品

年譜[1]によると、外村は三高在学中、その嶽水会雑誌に戯曲「煉獄」を発表している。大正十二年、彼の二十二才の時である。翌十三年には、同誌に小説「友情」を発表、この年、三高を卒業、四月に東大経済学部経済学科に入学した。六月に麻布六本木カッフェー「マスヤ」の女給、八木とく子を知り、翌年九月結婚した。この年同人雑誌「青空」を発刊し、「抄秋」「小さき者」などを発表した。とく子との恋愛に苦しみながら滝井孝作の作品を識り、文学的開眼のようなものを得たのもこの年であるという。大正十五年（昭和元年）七月には雑誌「辻馬車」に「點景」を執筆、翌年、不同調には「夜路」を発表しているが、三月東大卒業、十一月に父吉太郎の急逝に会って父業を継いだ。文学を棄てさせた理由については、彼は作品「濡れにぞ濡れし」の中で次の三つを挙げている。一つには妻子があること、二つにはプロレタリヤ文学と既成文学観念との迷いの為、三つには、父の示す愛情に叛きかねたこと、ここまでの、つまり、習作的初期の作品は、一言にしていえば、何れも私小説風の作品で、江州の本家と、その封建的な家族制度に対する反抗や、新しい恋愛の苦しみと喜びが若々しい感傷的な筆致で述べられているといった態のもので、彼もいう様に、徒らに気負い立って、概念的な、小説的肉付けの不足したものであると考えてよさそうである。昭和三、四、五、六、七の五年間の事情につい

ては年譜には次の如く書かれている、〝三越、松坂屋を始め各デパートと口座を開き、北海道、東北各地にも出張して、奮闘したが、所詮、その任でない事を知る、〟つまりは近江商人の家に生れ、商売については全くの素人ではない訳ではあったが、彼の努力も結局実業の世界ではむくわれなかっという事になる。

(2) 文学再出発の作品と「鵜の物語」

五年間の空白の後、文学再出発を志し、阿佐ケ谷に転居した彼は意気まことに軒昂たるものがあり、「鵜の物語」「藤田専務の手帳」「中井商店の身上」「灼傷」「歩銭」「神々しい馬鹿」などを矢継早やに発表している。この一連の作品では「鵜の物語」が量質共最もすぐれているであろう。これは、問屋にぞくしている地方販売の出張員が、結局自分達は資本の為に操られている鵜飼の「鵜」に過ぎないことを知らされる、随分とみじめな物語である、「第一線に立つ彼等出張員達は、勿論勝れた売手でなければならない。快活で、敏捷で、そうして第一満々たる闘志がなければならない。彼等の血管の中には、昔、天秤棒一つ担いで、野を越え山を越えて売り歩いた祖先の血が、今もなお脈脈と流れているのだ」という風に書き起された出張員の中の、二人の有能な地方外交員、岩田、杉野の両名が悪戦苦闘の末、「あてらは皆鵜だ。」と自覚する結末まで、手堅く構成され、筋の運びも巧みである。外村の五年間の実業界での体験が滲み出ている様な作品である。外村が文学の出発に於て手がけたものが私小説風なものであったのに反し、再出発してものされたこれ等の作品は客観小説であった。が、その素材は、尽く商家、商人を描くものであって後年彼が、「私はいわゆる私小説家といわれ、自分の体で経験したこと以外には、書く興味がうすい方の小説家である」と述べている事と、合わせ考えられるべき事柄であろう。

(3) 長篇「草筏」

ひきつづいて昭和十年、彼は長篇「草筏」を起稿し、殆んど四年の歳月を費して昭和十三年、これを完成している。芥川賞候補となり池谷賞を受けた。この「草筏」とはどんな作品か。一口に言ってこれは、これまでの外村の作品の集大成であると言える。表現形態の上で言えば、フイクションの勝った自伝的小説と言えると思うが、集大成という意味は、勿論、素材的には、初期の私小説風のものは、晋という少年の目を通してここに描かれているし、後の客観小説に登場する商人ものの要素もここにあるという事柄を意味する。小説手法の上での晋少年の描かれ方には、単なる自伝小説というにとどまらない、殆んど私小説にも似た肌理の細かさと作者の心情の投影の濃さがある。例えば、その書出しの春の夕の風景描写、又十一章の晋が庭の池の鯉を見ている描写、この晋の眼を通して描かれた風景描写の生々しさと、童心への傾倒振りがそれを物語っている。又他の人物の描写、例えば真吾（晋の叔父）を採り上げてみると、これは又晋にも劣らぬ詳細さで、全く客観小説並みの描かれ方である。乱暴な、惨忍苛酷な性情の

少年としての生い立ち、その結婚、と殆んど全篇に登場して来てこの描写は、晋の眼を通して、とか、晋に即して描かれるといった性質のものでは決してない。盲人の章石とか、藤村家の構成員の殆んどの人物描写が、何れも客観小説風な筆致で叙せられる。であるならば、集大成の意味は更に進んで、外村的特徴の著しいその小説的手法の意味に於てであるところに、その独自性と意義があるようだ。つまり、単なる自伝小説ではなく、彼の、それまでに体得した、私小説と客観小説の手法を悉く駆使して、一種独得の自伝小説を成し遂げているわけなのだ。ところで、この「草筏」一篇の主題は何か。それはやはり近江の豪商の家にまつわる業の深さを描かんとしたのではなかろうか。積極的に「天秤棒一つ担いで東に西に利を追って、野越え山越えして売り歩いた、祖先の末裔は」ここではその進取の気性を喪失して徒らに保守退嬰、頽廃的で、エゴイズムの亡者と化している。即ち晋の父治右ェ門は癇癖の強い、激情的な利己主義者で、我儘な馬鹿殿様を思わせるし次弟の辰二郎は商才はあり乍ら、精神的薄弱児の様に莫迦話に夢中になり、怠惰、卑屈、無恥な人間的弱点に溺れ入ってしまう。三弟の真吾は前述の如く、人情や愛情を逆説的にしか理わさぬ、独裁者的な鉄の意志の男として描かれ、藤村家の良心を代表したかと思われる、或は淀野隆三に言わせると、「藤村家の宿業の賭罪者」的存在者である晋と真正面から対立する。私は然し小説として、この真吾の果す役割は非常に重大であろうと思う。少年時既に厄病神の如く恐れられ忌み嫌らわれた真吾が、青春時代を過して全く悪魔的な人物に成長してゆく、この事情を作者はこう説明している。

(3)

——真吾は何故このように変ってしまったのであろう。大方それは彼の青春のなせる業ででもあろうか。事実、真吾のような冷酷な誇を持った男達は往往にして自分達の青春を高らかに唱ひ挙げるかはりに却ってかうして黙り込んでしまふものである。彼等は人人の「恥しい情」を許さなかった。彼等はまた「その悲しき報として」何時、如何なるときにも「美しい夢」を持つことを許されなかった。彼等は自分達の青春をさへ忌み憎んだ。否それはさながら呪はれた石のやうに、彼等は笑ふことも泣くことも出来ないのであった。——こうして、この真吾の真骨頂は彼の結婚に於て烈しく露呈される。彼は結婚や婚礼の儀式を醜悪なるものとして嫌悪した。式場に居並ぶ親戚達の馬鹿面、怯懦な小獣類を思わせる様なその好色的目差しと無恥。うら恥しげな花嫁姿の嘘八百さ、彼は遂に妻を買うという事に於て、結婚を承諾するのである。

——彼は甘ったるい平和を憎むのだ。お目出度い善行を憎むのだ。彼は悪魔の名に於てこそ結婚を望むのだ。——

そして、その初夜、花嫁の淑子に対して、呪詛的な言葉を吐く、

——この家はね、淑子、丁度君のやうに尊いものを裏切った者の落ちる地獄なのだ。どうしても逃げられないのだ。君もさうだ。わしもさうだ。さうして兄貴どももさうなのだ。あの兄貴どもが如何に呪はれた人間であるかといふことは、君にも今に直ぐに解るやうになるだらうよ。——

然し、既に明白な様に、これは真吾の人情愛に対する逆説的表現なのであって、彼の心底には「羞恥」が強くひそんでいる。それは彼が人

目を避けてバイオリンを弾いたり、所謂「羞恥」に対して柔和な態度に出られずにことごとにこれを敵視することから察知出来るというものである。この真吾の性格は、まるで、カラマゾーフの兄弟にも等しい、毒々しい病的人物揃いの藤村家の人々の中でも一際、鮮やかに描かれている。それはアリョーシャの如き清純を求める晋少年に対する、一つの敵役であり、従って晋の持つ純粋さを際立たせ、その理想主義を甘く浮かさないで、これを複雑化し、刺戟し、発展させてゆく役目を持つものである。この事は勿論続編「花筏」には、更に発展的に引継がれていった事柄である。正しくは、モデル的に真吾なる人物が実在した為に、ここに登場したものでもあろうが、又作者外村の筆の熱っぽさから感じられるところは、人間の愛情と羞恥を描こうとする作者の好みと情熱がこの様な強烈なイメージを描かせる結果となって現われたのだと私は見ている。思うに晋少年は既に、藤村家を嫌悪する、そして真吾のこの様な「生ぬるい、然も卑しい臭いに充ち満ちた生活」に対する烈しい嫌悪は、人工的虚飾に満ちた社会に対する「原始人」の叫びの様なものとも共通するものではないか。さすればこれは

——すべての芸術家が大なり小なりに反俗的である理由も人造人間に対する反撥のためであろう——(4)

と云った佐藤春夫の言葉にも通ずるもので、外村が共鳴した、佐藤春夫のこの「文学する心」に共通したものが、晋や、真吾を通して主張されたものではないかと思われて来る。要するに戦前に於ける外村の全作品の、これは集大成である事に間違いはなく、然もここに篭められた文学的特質は、約二十年後の作品「花筏」にそのままに通じ合い、戦後の外村の私小説の基調ともなっている。つまりは殆んど外村文学の生命の支えとなったものがこの「草筏」に於て文学的な定着を見たという事が言えるのであって（然も五年間の文学的空白を置きつつ、作者時に三十余才）この事は彼の作家的稟質の卓越性を物語るものであると考てよいのではないか。

二　戦後の作品

(1)　亡妻もの・新妻もの

外村の作品系列を見ると、外村の文学の真骨頂は何かと言えば、それは戦後の彼の私小説にあると、私には思える。彼は、彼が文学の師と仰いだ滝井孝作と同様、昭和十七年以降、終戦まで殆んどその文学的活動をやめており、昭和二十年、終戦直後、「新潮」再刊号に「秋風の記」を執筆、感懐深かった。と年譜に誌しているが、以後の彼の文学的活動は誠に目覚ましい。昭和二十一年九月には、滝井孝作、亀井勝一郎、浅見淵、上林暁、と同人となり季刊誌「素直」を刊行、外村はそれに長篇「父の思ひ出」を連載している。これは戦後久々振りの長篇であり、単なる回想の文ではなく、小説的結構と配慮とを立派に具え、然も私小説の短篇と殆んど同様なキメのこまかさと、表現の円熟振りがみられ、安定した文学手腕が発揮された佳作である。然し尚極論すればその短篇等諸作の一つの高まりは、しかし何といっても妻と

く子の死であるとして間違いはあるまい。この事は何よりもその妻の死の前後を扱った一連の作品を読めば明らかである。即ちその発病を誌した「撩乱」、妻病臥中の子供達を描いた「火宅」、妻病臥中、作者が能を見に行く事を書いた「道成寺」、妻の臨終及び死後を書いた「夢幻泡影」と「迷ひ地獄」とがそれである。

――昨朝妻が倒れ、妻にとって、決定的な一瞬であることを自覚した瞬間、パチッと音を発するやうに、妻への愛情が目覚めたのである。――(5)

と言うような妻への端々しい愛情がこれ等の諸作を文学的に高揚させたのではないか。かけがえのない愛する者を失った悲しみが、傑作を生ませるとは、誠に私小説家の業であるとより言いようがないとの思いが今更の如くせられるというものである。「火宅」というのは所謂火宅無常の世界の火宅の意味であろうが、首尾結構見事に纏っ名作の一つであろうと思われる。息子がこの父に反抗対立する場面は淡々とした筆のまま、この人の世の厳しさを描いて余蘊ないものである。

――私のどこが、いつもこのように子供等の心を乱すのかと、私は自分の我執の強さが悲しかった。或は父と子といふ同臭の肉体が、ただ訳もなくむつと憎み合はねばならないのかも知れなかった。いづれにもせよ、親子といふ人間の奇妙な契りの哀れさだった。（全集巻三・頁二六〇）

同じく、息子との対立を描いた丹羽文雄の「有情」以上に、読む者の心に泌みるもののあるのは、浮世の人間性への絶望感の深さと、浄土真宗のとり入れ方の密度によるものではないかと思われる。

――私も妻も幸福だった。少くとも不幸でなかったといふことが出来よう。人間、男も女もどんな顔をしてゐても、男女の交りなど所詮他愛ないことだった。が幸にも、私達はその他愛なさを拒みはしなかった。妻は五人の子供を生み、私には叱られ通しながら、体振りかまはず働き続け、その最後、手足も萎えて倒れてしまったのだ。しかし人間といふものは所詮そんなものではなからうか。私とても同じこと、才もなく、ただ慌しい日日を送り迎へてゐる。しかも悔ひさへも諦めてしまった。さうして私達の人生はそろそろ終り、に近づかうとしてゐるやうだ。これ以上の幸福があるだらうか。（全集三・頁二九四）

「道成寺」の結末の一節である。ここに表明された、凡夫の幸福論の根底には、明瞭に、「歎異抄」や「自然法爾」の世界がある。滝井孝作の「無限抱擁」の題名のもとになった「夢幻泡影」の語をそのまま題名とした短篇の結末、母を亡った子供達と他愛なく二十の扉に打興ずる辺は、多くの人達によって、外村文学の絶唱とされている様であるが又「迷ひ地獄」の様なさりげない空想の中に案外、外村の詩と真実が宿っている様に私には思える。「最上川」以下の新妻ものについても、触発された作者の人間愛のたかぶりが佳篇、名品を生んで行った事情が汲みとられるが、筆は一層の円熟を加え、殆んど自由自在、全く無礙の境地に達したかの観がある。例えば昭和二十八年に発表された「黒い富士」と「季節」二篇を取り上げてみる。ここに表現された老年の端々しさに私は目を見はる。「みづみづしき老年」という言葉は、藤村が使い出した言葉の様に記憶しており、徳田秋声も又、老年

も又案外さばさばして良いものだと老年礼賛の言葉を吐いているが、外村のこれら作品に匹敵する様な端々しい老年文学には私は未だ出会った事がない。篇中、若い人の死に対して、

――不意に、得体の知れぬ悔しさが込み上げて来る。……どこからそんな悔しさが湧くのか省三（作者）は少し恐しいことのやうにも思はれた。（全集巻四・頁一一七）

と述べているが、この様な、生命というものに直かに触れて来る様な、人間性の深層部に密着した様なすぐれた感覚が作品に横溢しているのが、その特徴であり傑れている所以でもある。「季節」の中で、雨の中を百合花を売りに来る女の描写など川端康成以上に美しく哀しく、情感たっぷりに描かれている。

――死に対する恐怖を微かながらも感じるやうになったからこそ、生の欲びも初めて本当に判り始めたやうにも思われる。（全集巻四・頁一五七）

外村の五十才以後の作品には皆、右の様なものがモチーフとして働いているとも思える。私などは極端に言って、モチーフの上から、彼の作品を、亡妻ものまでのものと、右の様なモチーフの上に立つものとに二大別出来るのではないかと思える程である。そしてこの後期に属する作品中の代表作は「澪標」である。

(2)　「澪標（みおつくし）」と「濡れにぞ濡れし」

――外村君は日本の文学史上に私小説の金字塔をたてた。格調のたかい文体は、外村君がおのれの文学に対する信念からだったらう。柔和な印象をあたへる外村君の中からこれほどきびしい文学が生れたことは、ひとつの驚異である。澪標の以後には澪標はあらはれないだらう。外村君は生きてゐる作家に不可能をあたへた。――

全集巻五の箱帯紙に書かれた、丹羽文雄の言葉であるが、私にはさして誇張されたほめ過ぎの言葉とは思えない。この作品は幼年の記憶から書き起し六十才に近く夫婦共に癌の治療に手を尽くすまで、主として自分の性欲を中心とした生涯を叙したもので、題材的には「草筏」「花筏」その他戦前、戦後の諸短篇に何度も採られたものを含んでいる。そして尚、色褪せぬ新鮮さを感じさせる。一体「澪標」に限らず、外村は同じ材料を二度も三度も、作品化する執拗さを持っている。つまり作家として、己れを描き切った幸福者である、と言えばそうも言えるであろうが、短篇で採り上げられた場合と、長編に採られた場合とでは描かれ方に違いがある。この書き分けは鮮かである。彼には然し短篇、長篇の描写法というような計算だったものは恐らくあるまい。外村のは一篇一篇、テーマの置き方や描写態度が慎重であるに過ぎないのだろう。一篇一篇に新鮮な感動があり、発見があり、作者感懐の寄せ方に違いがあるからなのである。「澪標」のあとで更に又自分の全生涯を振り返った大作末完（絶筆、終りの方はてい夫人による口述筆記による）の「濡れにぞ濡れし」があるが、事情は同じで矢張り新しい味わいの差がある。

「澪標」は一つの自伝小説には違いはないがその幼い日を追想する筆は綿密で、その思いの深さ表現の微妙さは他の追従を許さない。

――記憶は刻まれても、直ぐ、忘れてしまったことも極めて多からう。が、私にとって、私の過去は決して空白ではない。記憶は失はれたが、幼いながら、数多い日日が埋もれてゐる。空白ではなく、深深とした闇の感じである。さうしてその闇の中には、形は見えないが、さまざまなものが潜んでゐるはずである、時には一瞬、ぱんやりその影を映すかと思ふと、忽ち底深く沈んでしまふ。――

幼時の記憶のないところは空白ではなく、深深とした闇の感じだと叙すあたりは誠に独自のものではないか。丹羽が、生きている作家に不可能をあたえたと言ったのは、恐らくは、外村が、己れを文学の俎上に乗せる場合の、その素材への肉薄振りを言うのであろう。「何ら世俗を憚るところもない大胆な記述、しかも文芸の本旨を失ふまいとする細心な描写」或は「好んで色情を取扱ひながら毫も卑猥の感を伴はない」と述べた佐藤春夫の言葉とも通ずるものである。「澪標」一篇、行文誠に円熟の極みを示す大文章である。私は書き始めから二、三頁まで読み進んで来て、幼い日の恐怖を述べて来たところで、

――「悪いことをしませぬように」朝夕、仏壇の前に坐って、私は合掌するより他はなかった。（全集巻四・頁九）

との個処につき当つて、この淡々たる文章に心から頭が下がってしまった。「濡れにぞ濡れし」についてもほぼ同じ事が言えると私は思うのであるが、描写の筆のこまやかさや、作者の感慨の深さや緊密さの上から矢張り「澪標」を第一の傑作としたい。

(3) 「筏」と「花筏」

「草筏」に直接続く作品は[6]「花筏」である。「草筏」では小学六年生で終った晋少年は二十三才の清潔な白皙の青年として登場する。全篇、三十二章にも及ぶ長篇であり、描写は小説的肌目（きめ）の甚だ細いものである。唯、時間のテンポが意外にのろくて、精々、一・二年間の出来事を叙したものである。従って小説結構の上から見て、稍断片的な感じで、晋の義父与右ェ門の死ではうまく結末にならない感じがする。各章に現われる場面や、その部分には作者の主張が強く現われ読者に迫るものを持っているが小説的纒りの上から訴えて来る、テーマは必ずしも明瞭でないだろう。筆はさすがに円熟の極地を示し、「草筏」の若い筆とは各段の差がある。

――花崗岩の切り石に劃された花壇には、ぼたんや、しやくやくや、ばらが豪華な花を開いている。無心の花といふよりはそれぞれの種が受け伝へた、それぞれの形と色彩を、初夏の陽光が降り注ぐ中で、極めて大胆に誇示しているかのやうでもある。その花壇の一隅に、空色の矢車草が、同色ばかり群り咲いているのも、大輪の花花に劣らぬ、旺盛の生命力を感じさせる。（全集巻三・頁一〇三）

この様な花の姿を写した文章には私など殆んど出遭った事がない。単なる花の姿ではなくて、花花の根源の生命を追求しそれを写しとったものなのである。これはもう、一つの立派な思想である。現実の生の根源に思いを致すのがこの作者の重要なテーマの一つであるが、それならば「花筏」の主題は何か。

――いかに人間の愛は愚かで、無力であるにしても、この風景の中

に秘められてゐる、人間の愛著はあまりにもつつましかった。このやうな狭く貧しい土地に、親から子へ、子から孫へ生き続けて行くためには、このようなつつましい愛著だけが必要であるかも知れなかった。（全集巻三・頁一九一）

仏教の無常感の中に人間の愛情を置いて描こうとするのが、外村文学の一大特徴であるが、いじらしい人間の愛著の姿に、人間的哀れを定着させようとする、これが又もつて「花筏」の主題というものではなかろうか。「草筏」と同じく、悪魔主義を代表する真吾があくどく、活写され、「路子」「艶子」という二人の女性は又、女の性の哀さをむき出しにされ、形の上では真吾に凱歌があがった如くであるが、晋の清潔な主張が最後まで些かの妥協もなく貫徹されている、そして人間の性の姿、性の威令に慴伏せざるを得ぬ現実を真宗的な態度で肯定しようとするところに晋の人生開眼が描かれる。性につまづき、肉親愛に絶望し、その家より出て行かざるを得ぬ晋の姿は、正しく作者外村の若き日の姿そのものであり、表現は、自伝というより殆んど私小説のそれである。

「草筏」「花筏」と並べてみて、「筏」は誠に奇妙な作品である。舞台は、前二作と比べて、古い租先の時代を扱う。外村には唯一つの「時代もの」である。雪の近江路を踏んで孝兵ヱが江戸に入る。天保十二年の十二月二十五日のことであった、というのが書き出しである。藤村家の当主である兄与右ヱ門との温かい密接な兄弟愛に結ばれながら、商人としての傑れた手腕を発揮するが、中に気性の烈しく潔い美婦りゆうが登場したり、妻女と強盗との物語もあり、りゆうの弟、新之助と孝兵ヱとの北海道への豪快な旅もある。孝兵ヱが北海道の湖上で水死するが、与右ヱ門がりゆうを連れて北海道に行かうとするところで物語は終りになっている。作者、五十五才、昭和三十一年一月閣筆の作品であり、野間賞を受け、佐藤春夫より「真に名作と言ふべし」と推賞された作品である。作者の後書によれば、「草筏」より早く、その一部を発表した事があったが、当時の作者にはとても手に負えぬところから中止し、爾来、二十数年、胸中にあたためられた上、自分の年齢を忘れてしまう程の初心な情熱を持ち続け得た稀有な大作のようである、

——私は所謂「私小説」といはれる作品を書く時と少しも変らぬ態度で書くことが出来た。むしろこの作品を通じて、私は「私」の血肉の源を探りたいと願った。（全集巻一・頁二一一）

とあるから、この作の性質なり、そのテーマの程も知れようというものであるが、形の上からは、「鵜の物語」式の客観的作品に属する唯一の長篇と、これを見る事も出来る。又、己が租先をモデルに採り、租先の心を探らんとする姿勢は、藤村の「夜明け前」を連想させる。そういえば、古い日本の家や、その因習に拠って立つ作家であるという点から言っても、外村は藤村と対比せらるべき作家であると思われるから尚の事である。又、客観的小説、租先をモデルにした作品とは言いながら、この小説の主人公、与右ヱ門、孝兵ヱ二人の兄弟は、作者、外村の対蹠的な二つの面を代表する、作者の分身と考える方が自然の様で、尚又、「性」に対する場合の倒錯した情念の描写とか、

——不意に、すっと、どこかへ消えてしまふんぢやないか、と思っ

たりしたのですが、かうして二人でお話してゐると、却ってこちらの気持が安まるやうで、いつかすっかりあなたに寄りかかってゐるんです。（全集巻一・一一六）

と言った、性格的な一種の強さは、作者外村の人柄を思わせるし、篇中、孝兵ェが妻と愛人の二人の身体を思ひ浮べて、二人が同じものを同じ数だけ持っており、然も一つとして同じものはなく、目も、耳も鼻も、指も、その指の爪さえも、二人はそれぞれに「わたしのもの」を持っている。

――孝兵ェは二人の女のそんな「わたし」が哀れだったのだ。――

と、述べているが、この思いは「澪標」やその他の短篇にも、殆んど同じ文句のまま出て来る。つまり、分身は分身でも、作者の投影は、孝兵ェに濃かった訳である。

外村の作品中、最も毛色の変ったこの作品の文芸的な価値については、賛否色々で、落着かない様であるが、私にもしっかりした評価は持ち合わせていない。可成りにフイクションを駆使した時代物、租先を描きながら殆んど私小説を書く如き気持で書き抜いたこと、扱われた問題が、武士階級と町人階級との衰退と興隆、天保時代の経済事情、女性のの哀れさなど、盛り込まれた要素が多過ぎて、小説的纏りの上から、感銘が薄くなっているように思われる。極端に言えば、作者外村は、小説の場を租先の生きた時代と場所に借り、己が分身と、その分身の本質的な姿を鮮明化、把握化にまで持って行くに便なる人物を配して、自己の本然の姿を追求したのではなかったか。然もこれ等の追求の仕方が、観念的、強引に過ぎる面があり、その結果、構成上からの部分描写や人物の動きと、史実とのからみ合わせに多分の拙劣さが感じられるのではないか。外村の持つ、ユートピア的世界は、高等なものであり、独自の美しさに輝やいてはいるが、多分にその童話的世界が顔を出し過ぎているきらいがある様に思われるのである。それでは最後に、この「筏」一篇の主題は何か。それは前言した様に、天明時代の商人としての租先の姿を描いた事には違いはないが、就中、人間の生と、性と、死の本質的な求明を租先達の史実を通して探ろうとしたものだと私には思える。然らば求明された結果はどうであったか。

そもそも外村の人生観の根本は、仏教による無常感と、その中に置かれた、愚かしくも哀しき愛欲虚仮の姿を見ようとするにある。虚仮なるが故に、又、ゆらめき出づる「この慈悲始終なき」人間愛の宿命的な様相をそこに定着せんとする。このテーマは、彼と、彼の一生を決定した浄土真宗との関連の上に於て再論されねばならぬものである。

三　外村繁と浄土真宗

(1)　幼時の思い出

「現今仏教講座」第四巻（角川書店刊昭三十年）に外村は「近代日本文学と浄土思想」という一篇を寄せている。面白いのは、その書出しに「私の形成過程」と見出しを置いて、まるで「私小説」の様な具合に幼年時代の思い出を書いている事である。特異なやり方に感じられ

るが、彼の作品に親しんでいる者には、又か、と思われる程、作品に何回も何回も出て来る素材であって、外村は「私」を語ろうとする時、常にこの幼時の体験と切り離なしては考えられないらしい。今、文学と宗教を語ろうとする場合、外村には先ず、己れの信仰体験を基にしなければならなかったが故に、敢えてこの形を選んだのであろうと思われる。この幼時の思い出というのは、年譜によれば、明治四十年、彼の六才の時の事で、春の彼岸会に村の禅寺の御堂に掛けられた地獄絵を見て、漠々とした恐怖を覚えた事を指すのである。殊に何の罪の匂もかぐ事も出来にくい、女亡者ばかりが入れられている、「血の池地獄」の絵が最も強烈であったらしく、そのあくどい血の色、腰巻の色、肌の白さが生の女を感じさせる点で一層その作用が激烈だったようである。又その翌年、生家が熱心な浄土真宗の家庭であったところから、朝夕の勤行に加わり、母と共に「正信偈」を誦し、又二兄に倣って、初めて日記をつけた年であったが、八重という女中が、裏庭の小屋の中で死児を産み、夜中、人目を避ける為長持ちに乗せられて、生家に帰されるのを見て、人生の秘密と、不安と、罪の匂いをかいだ。

——念仏すれば、救はれる。罪深い人間も救はれて、極楽に往生することが出来る、といふ。しかし、私にはどうしても信じられなかった。父母の念仏の声は、救はれた者の歓びの声といふよりは、生きる苦しみの声とも聞かれたし、暗い仏壇の中に、揺れ動く蠟燭の火や、立ち上る香の煙や、絶え入るやうな鈴の音は却って死に対する恐怖を感じさせた。（講座・頁一二六）

と、彼は書いている。少年の彼に僧侶達の読む棒読みの「三部経」は長く、退屈だった。説教もひどく紋切形で、つまりは、それは、恐れ、求める、人間の声でなく、固定化した職業家の声であった。

——念仏くらいで、あの恐しいものから救はれるはずはない。（講座・一二六）

宗教に対する反感と不信、それに盛んな成長期に入った少年の健康な身心には、いつか、あの地獄絵の恐怖も次第に色褪せ、宗教疑惑の念も薄らぎ、理数科を中心とする小学校教育は、地獄極楽は迷信であり、死後は一切無である事を教え、世の常の少年のように、それは単純に、外村にも作用し受け入れられて行ったのであった。

(2) 羞恥について

俗っぽく言って、内気或は、小心、という様な、殊に受身な性情の持主には、多く羞恥の感情が見られるものであるが、外村文学に色濃く出て来る特質の一つにこの羞恥の感情がある。彼はその著「入門しんらん」（普通社版、昭和三十四年）の中で特に「羞恥について」の一章を設けている。彼の説明によれば、羞恥の感情は特に「色情」の中にあり、然も羞恥は拒むためにあるはずでありながら、性は拒むことをゆるさない、そして、性がゆるさないことを人間は知っているから、恥かしいのであると、する。

——神を怖れるにも似た、あのような羞恥の感情にもかかわらず、愛するものを辱しめる歓び、性にはやはり罪の匂いが纏つて、離れないもののようである。（頁・一九四）

外村にとっては矢張りこの羞恥の感情は、原罪の中にあり、一対の獣になる事を命令され、自らが、自らの本来の姿にかえる恥かしさであり、自らを罪ありとする、神を怖れる心のなかから生れると言い得ると、推論する。そして女子に五障の罪ありとする仏教の原罪思想は、後世の女性蔑視の思想から起ったものでなく、むしろ、女性を性の中心と考えた原始人の心に発しているとしている。

——ときにアーナンダは世尊にとひ奉れり

「師よ　われは女人を如何にすべきや」

「アーナンダよ　女人を見ることなかれ」

「されど世尊よ　見たる時は如何にすべきや」

「アーナンダよ　女人と語ることなかれ」

「師よ　されどもし話しかけられたるときは如何にすべきや」

「かかる時は　アーナンダよ　こころをつつしむべし」

何という美しい会話であろう、と外村は慨歎する。

——私はこの言葉の美しさを信じるが故に当時の人人が愛欲に対して、したがって、その中心、といふより愛欲の根元であると考えていた女性に対して、瑞瑞しいまでに初心な罪の意識をもっていたことが察しられるのである。（頁・一八五）

外村の性に対する、そして女性に対する、性への郷愁の情と、羞恥、罪障の匂いは幼時の地獄絵に発し、彼の生涯と、全作品を貫いている。性の羞恥に対して常に罪障の思いの切り離せない外村は又、女性の羞恥に出会って、はじめて性的興奮を覚えしめられる性向の持主でもある。彼自身、これは到錯的性心理であって、その性質は著しく女性的であるとしている。

——男は一種の惨酷な感情なくしては、女の体を開くことは出来ない。志村君（外村）は惨酷な感情に興味を抱くことが出来ないので、女の立場に自分の感情を置き換へることで、細君に対する、共鳴りにも似た愛情を新たにしたのである。（全集・巻五・頁四三六）

右は、外村が鷗外の「キタ・セクスアリス」に倣って制作した小説「愛しき命」の一文であるが、更に再び、自分の性欲が世間の男性のそれと大いに異っていることを知って、これはむしろ女性の側を描く方が性にも適い同時に、女性側に照明を当てることによって自分の性欲史をより正確なものにすることができるかも知れぬと考えて、小説「夢は枯野を」という様な一種独得な作品をものしている。

——女になりたい！　晋は必死にさう願つた。さうしてその恨しい願の悲しさに声を忍んで泣入った。（全集・巻二・頁一三九）

「草筏」に出て来る文句であるが、今迄どんな作家が「女になりたい」などと叫んだことがあるだろうか。誠に徹底したものといわなければならない。「羞恥」と外村文学という事で、私は、彼の宗教意識の展開をあとづけようとして多少、冗舌に過ぎた様であるが、外村文学を云々しようとする場合どうしてもその本質的なものの一大要素として彼の「羞恥」を理解して置く必要があると考えたからである。一言にして言えば、外村文学の終生の課題は詮んずるところ、女体の哀れさを追求する事にあったと私は考えている。追求というのが妥当でないなら、彼が人生の秘密を嗅ぎ、その悲しみを知ったのは、実に女体を通してであり、その哀れさが彼の人生そのものを色濃く染め上げてし

まったのだ。この事は後に再び触れたいと思うが、男女の性、性の営みが彼の文学の最初にして、最後の場にえらばれている、と私は考える。その彼の特性として、並はづれた羞恥と、その根底に、罪障の思いのひそむ事を繰り返し念を押して置きたかったからである。

(3) 歎異抄との邂逅

――私は終始恥しかった。男の卑しさが身に染みた。が、一人の女中が歩いて来る。女中は高い縁側に上るだろう。私はその脛に白い力瘤が出来るのさへ知っていた。私はそっと目を上げて、盗み見るのを、どうすることも出来なかった。(講座・頁一二七)

外村が思春期に入って甘美なそして、より濃い罪の匂いを嗅ぐ事になったのである。そして己が肉体から発する罪の悪臭から救はれんとしても、宗教は「目を抉り出せ」「手を切り棄てよ」と教える。この冷い拒絶の前に呆然と立ちつくした外村は、生きるに真面目である文学の世界に親しみ出す事になったのである。そんな時に、彼は「出家とその弟子」を熟読した。大正十年、二十才の時と、年譜に誌されている。単なる小説として「出家とその弟子」を読みすごし得なった彼は、当然その原典である「歎異抄」に導かれて行った。

――「歎異抄」といふ書物を買って来て、毎朝、少しづつ読み初めた。しかしその書物には晋の思ひがけぬことどかり書かれていて、まるで脳の細胞組織を逆に撫でられるやうな思ひがした。(全集巻三・頁八一)

青年の正義観がこの書の至る処に抵抗を感じさせたのである。この彼が如何にして「歎異抄」にみちびかれ、親鸞の教えに法悦を覚えるに至ったかについては、前述の「現代仏教講座」にも「入門しんらん」(夏の夕)にも略述されているが、又彼の長短おびただしい作品の中から自由に拾い出し、あとづける事が出来る。簡単に言ってそれは、妻とく子との結婚生活の中に於てであった。結婚後間もない頃、彼は、とく子が警察官の取調べを受けた話を聞き、その羞恥的姿態から例の倒錯的性欲の興奮を感じ、自分の着物も投げ捨てる。その一瞬、不思議なことにひどく神妙な気持が起った、と、言うのである。

――あの時、私は自分の醜行に呆れはてた。私はそんな自分の正体を自分の手であばかうと、自分の着物を脱ぎ捨てたのではないか。さうして人間の愛の愚かさを直視し、更にそれに徹することによって、あの不思議な幸福感が湧いたのではなかったか。(落標・全集巻四・頁六六)

つまりは、自分の愚かさを心の底から思い知ったことによって、今まで「歎異抄」に抵抗を感じさせていたものが無力化したのであると、彼は述懐する。

――不謹慎な話ではあるが、私のつよく実感した一例として書く。妻との営みに際しても、私は恥しくはあったが、卑しいとは思わなかった。不潔感もなかった。欲望にとり乱した自分を、等しく妻を辱めるようなことはなかった。私は有難かった。このように妻を愛し得る自分が有難かった。このように自分を愛し得る妻が有難かった。自分が、妻が有難いのではない。自分を、妻を存在させてくれているものに対する感謝であった。(夏の夕・頁一六五)

妻との場に於て、「歎異抄」を了解した。これは奇矯な表現であろう

か。偽らざる人生体験として認めざるを得ないのではないか。妻とく子の死に際会して、外村は「この慈悲始終なし」の文意を始めて感得した、という。

――煩悩具足のわれらは、いづれの行にても、生死をはなるることあるべからざるを哀たまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なりよりて善人だにこそ往生すれ、まして悪人は、と仰さふらひき。

（歎異抄・第三章）

「入門しんらん」には右の文を引いて次の如く述べている。

――つまりものがとれて、水が自然に流れ出すように、私は滞うることなく親鸞の声を聞くことが出来た。その時、この「歎異抄」は亡くなった妻の下宿の机の上に開かれていたのである。（頁一六六）

(4) 外村繁の信仰

外村の信仰を纏ったもので続んでみたいと思われる人々は、前述の「入門しんらん」が最も手頃であろう。但し、この本の叙述は例によって、ひどく外村式で、一風変っている。例えば、「或る手紙」と題するその第一章には括弧の中に「自利利他、自力と他力、不可思議」とあって、一寸見には単なる私小説と思われるものに、外村はその様な意を含ませたものらしい。同じ様に「病院にて」には、「信心、自然法爾」。又実際の旧作に一寸手を入れた作品、「業縁」「妻の死」には、「この慈悲始終なし」とある。まともに真宗を語っているのは、「夏の夕」「愛欲」「しんらんの生涯」の、三章位のものである。その中で彼の信仰内容は殊に「夏の夕」一篇に簡潔に述べつくされている様に思われる。その信仰者としての、浄土真宗に対する了解ぶりを見るとひどく平凡な感じがする。唯、そこに述べられている表現の中から、一、二、抽き出してみる。と、

浄土とか死後の世界とかいうものは、共に人間の思惟を超えたものだから、空想的で、非合理的で、それは思想の世界というより、詩文の世界の様でもある。或は「詩と真実」の様でもある。その可能性を思わぬでもないが、親鸞にとってはそんな事はどうでもよかった。[10]一念仏もうさんとおもいたつ心」も、仏から賜わったものであるとした親鸞は、つまり、死だけでなく、自分の生まで仏に一任してしまったのであった。否定は肯定になり、不安は安心になり、自力の誇りは他力の感謝になった。そして最も重要な事は、死後の浄土をあてにするのではなく、このままに生きるという確信であり、生きる力が無限に湧いて来るという事実であるという点を強調している。人の信仰を語る事は難かしい。この時最も大切な事は、信仰がその人の切実な体験となっているか、その人を現実に生かしているか、という事でなければならない。外村は、

――私はさきに解釈めいたさかしらごとを筆にしたが、いまこそ[11]「たとひ親鸞聖人にすかされまいらせて」も、悔いない思いの切実なものがある。（夏の夕・頁一七四）

と、痛切な一言を述べているが、所詮、これは人の心の秘密に属することである。我々は人間の、入信の過程は可成り詳しく跡づける事は

出来る。トルストイにはトルストイの、そして、内村鑑三には内村鑑三の、或は椎名麟三には椎名麟三の。でもこれは夫々の人の入信物語である。我々は別にそれを疑いはしない。然し、信仰は体験である。今の場合、外村の言葉は言葉として、私達にとって最も重要なものは、そして最も有難いものは彼の作品なのではあるまいか。彼、外村は、どう生きたか。これに答えるものとして、彼が私小説家として残していった名作「夢幻泡影」は「この慈悲始終なし」という「歎異抄」の一句を、彼の現実体験を通して我々に生々しく押しつける。

——親鸞の現実生活にくらべると、私は至って幸福者である。先妻には先き立たれたが、いまの妻と結婚した。五人の子女も無事に成長した。いまの妻を「ままはは」などと呼ぶものは一人もない。満八十一の母も健在である。私の仕事も自分の才能にくらべると、分に過ぎるほど認められている。その結果であろう。経済的にも、けっして豊かとはいえないかも知れないが、毎晩の酒は事欠かないほど恵まれている。（入門しんらん・頁一七六）

前掲の「道成寺」の一文を更に後年、別の言葉で述べた様な文章であるが、正しく「自然法爾」の生活者の言葉の様に私には思える。そして、最後に一言しなければならぬ彼の特質は、「きわめて不思議な力に任せるほかはない」という外村の現実生活に於て、最後の最後まで離すことの出来なかったものは、人に対する愛情であったという事である。

——人間の愛がいかに愚かで、利己的で、無力であるかといふことも、私は既に知った。しかしその不思議なものの中に人間をおくことによって、人間の存在の無常性は一層はっきりする。更にその無常の中に人間の愛をおくことによって、私の妻への愛を愚かなまま新鮮にすることができた。（澪標・全集巻四・頁七六）

外村の現実生活と、その信仰と、文学との、これは融合一致の姿なのではあるまいか。これは「そらごとたわごと」にひきづられている人間の言訳けや弁解の言葉ではない。よろづのことを「そらごと、たわごと」と見極めわめのついた人間が、その「そらごと、たわごと」のままに力強く生かされている姿を表現したものである。ぎごちない表現にはなるが、これは外村の「念仏」である。「念仏」が呪文的な口称の「念仏」であってもならず、現実世界と切り離して、死後の浄土をあてにする、観念の遊戯であってもならないだろう。そして又、更に大切なことは「そらごとたわごと」そのものに対立したり、それと切り離したりした「念仏」ではなく、「そらごと、たわごと」の中に遍満し、むしろ、それ等悉くが生かされ切ることの中にあるのが「念仏」でなくてはならぬという事であるだろう。「澪標」は勿論のことではあるが、戦後ものされた彼の短篇の悉くは、そこに文学作品としての出来、不出来はあっても、何れも、外村の念仏の心から生み出された作品であると断定してもよいと、私は思う。信仰の告白の最後に外村は左の如き「口伝鈔」の一句をひいているが、意味深い。

——人間の八苦の中に前にいふところの愛別離苦これ最も切なり。——

四　外村の文学（あとがきに代えて）

外村繁全集六巻に盛られた作品の悉くは、或意味では、一種の「愛情の経典」とも言える。一人の凡夫として生き、凡夫としての自覚のもとに、死生一如の境地を自然法爾の世界に置こうとする。この悲願がどのようにして、どう果たされたか。作品が何より雄弁にそれを物語っている。人生を真摯に生きようとした青年外村が、滝井孝作の作品によって文学開眼を受け、同人雑誌に発表した初期の作品（私小説風の）は、今は初期の習作として読み棄てて、良いであろうし、又文学再出発を志して制作した「鵜の物語」以下の客観的小説、商人、ものの一群も小説勉強の過程中に成った作品として、軽く読み過ごしてよいであろう。彼の魂に巣喰う、「この生を如何にすべきか」の人生的苦悩は、もっと端的に、己れ自身を生々しく俎上にのぼし、彼の目はひたすら自己の内奥に向けられて行ったのである。まこと、この期に成った「草筏」一篇こそは、外村が、一度は書かざるを得ず、そして殆んど生命を托しつつ書き抜いた作品であったのである。初期の私小説が文学開眼であるのなら、これは、人生開眼の書であり、又「真の外村文学」の開眼にも成り得ている。そしてその開眼は、何よりも「性」のつまづきに発しているところにその大きな特徴があった。

——抑もいかに聖なる人物でも、どんな乱倫な人間でも、また肉欲というものをどう慎しんでも、いくら乱用しても、いずれは人の子の、ひとしく性の威令に慴伏しない者とてはないのである。（グウルモン）——

極度に羞恥の心を持った外村の前に立ちはだかり、彼を驚づかみにしたものが、この「性の威令」であった。「草筏」や「花筏」の中心テーマは、見方によれば、晋少年の「性の威令」との戦いであるとも言える。如何に、この、勝つことの出来ぬ敵と戦ったか。そして敗北せざるを得なかったか。然も大切な事は、他の人生の諸事と同じく、如何に彼が妥協や、絶望からでなしに、そして一分一厘誤魔化すことなしに受け入れて行ったかというところにある。そしてこの至難のわざを彼外村が、親鸞を通じて成し遂げたというところにその文学の特徴がある。彼を目して、真宗作家と呼ぶ所以がここにある。

戦後の彼の作品は、一つの生の讃歌であるとも言い得よう。人生の大否定をかいくぐった肯定の上に立つ、自然讃歎のそれは詩である。小説構成その他の点から、その瑕瑾を云々した「筏」も、作者の円熟したこの人生態度の上に立ってものされた作品である事には間違いはない。与右衛門の剛腹と活気、孝兵衛の柔和とその落ち着き、は、共に同一のものから発している。人生無常そのものの中から出て来る確かさを身につけた者の姿である、そしてこの大主観に貫ぬかれたその筆は、北海道の自然の壮大な描写や、千鳥の必死の戦きの描写の端々にまで及んでいる。

一つの全集を読んで、泌々とその作家との出遭いを感謝出来るという事が、文学読者の冥利というものであるなら、外村は間違いもなく我々の期待に副う作家の一人である。この人生的な要求に対して、彼が私小説家であって、日常生活の端々に至るまで、その肌目の細かい筆に導かれて、深く作者の思いに参入出来るという事がこの場合、一つの大きな利点の様にも思われる。生涯の全作品を辿り得て、一個の真摯な魂に逢う事の意義と、三昧とが、近代文学に於て尊ばるべきもの

であるなら、外村繁全集は一つの傑れた古典として文学史上銘記さるべき存在である事を信ずるものである。同じくカソリック作家である、グリーンとモーリャックについて、丹羽文雄は、そのキリスト教思想を、グリーンは華々しく表面にうたい、モーリャックは表面に出さない。だから、グリーンは早く忘れられ、モーリヤックは後までのこるだらう。僕はどうも、グリーンの方らしいと、言った。外村繁は正に後者に属する作家である。

（完）

――昭、三七、八、二〇――

註

(1) 筑摩書版「現代日本文学全集」のもの、他に外村全集巻六に八匠衆一氏のものがあって詳細であるが、筑摩の方は外村自身の手になったものらしく、文章に面白味がある。作者の年齢も数え歳になっており、それに従った。

(2) 「入門しんらん」普通社刊、あとがき、昭、三四、一二・頁二五六

(3) 現代日本文学全集（筑摩版・頁・三九八）

(4) 佐藤春夫「文学する心」現代仏教講座第四巻の外村の「近代日本文学と浄土思想」の中に引用されている。

(5) 長篇「濡れにぞ濡れし」（全集巻五・頁一六九）

(6) 執筆は「筏もの」の最後、昭三二、十一、仏教綜合誌「大世界」に連載、翌年完結。

(7) 歎異抄、第四章

(8) 小説「黄昏」に小学二年生のものが一部載せられている。

(9) 聖書、マタイ伝。

(10) 歎異抄・一章

(11) 歎異抄・二章「たとひ、法然上人にすかされまいらせて、念仏して…」

（国文学、講師）